

小学生の「目標投げ」の指導法に関する事例研究

—小学校高学年期の児童を対象にして—

小幡英昭(1506012)

〈序論〉

研究動機・研究目的・研究方法

筆者が今回目標投げについて研究したいと考えたのは、日々の練習の疑問や経験からである。筆者が目標地点へボールを投げる時に成功、または失敗することがある。多くの場合には感覚的な筆者では説明できない何かを感じていた。また、大学の練習を行う中で明らかに的確に目標地点へボールを投げる能力に差があり、その差の生じる要因を明らかにし指導法を考察していきたい。

本研究の目的は、小学校高学年の子どもたちがその発達段階に応じて、どのようにボールを投げるのかを把握しながら、パスの正確性や技術の向上をはかるためにどのような指導法があるのかを明らかにすることである。本研究の方法は、「ボール遊びの集い」に参加する秋田大学教育文化学部附属小学校高学年の子どもと一緒に練習し、指導していく様子をビデオによる運動観察によって、子どもの動きかたを把握する。そして、「投げる」運動がより高い安定性や経済性をもった運動となるように、子どもにとってどのような投げ方がよいのかを関与観察により考察していく。

〈本論〉

第一章 事例研究の意義

問題を研究するためには、体験そのものに迫っていくことが必要となる。そういったことから、重要になるのが体験に密着した事例研究である。「事例研究は、従来の客観主義が導いてきたような科学性、客観性、公共性、あるいは再現可能性とは違ったものを追っている」のである。研究の中で、対象者の変化過程の特徴、それらへの対応するなかで感じたこと、考えたことなどから、対応の仕方について知ることができ、後の活動に役立たせることができるのである。

第二章 小学校高学年における運動の発達と指導のあり方について

小学校高学年における子どもは、基礎的な身体能力を身に付け、実生活において運動を豊かに実践していくための資質や能力の基礎を培うようにすることができる。また、体を動かすさわやかさを体感し、探求する楽しさや仲間との共感なども芽生え始める。したがって、さまざまな運動や競技を体験させ「動きをつくる」ことが大切である。だからこそ、小学校高学年において、身体能力を身に付け、実生活において運動を豊かに実践していくための資質や能力の基礎を培うようために、子どもの発達に合わせて、その時々適切な動きを身につけられるようなスポーツ環境を整えることが大切なのである。

第三章 ハンドボール競技における投げ方

「ボールのスローは、チームプレイを完成させるための決定的な技術的能力である。まず、互いにパスすることが、攻撃チームを相手ゴール近づけ、そのことによって成功率の高いシュートが可能になる」。このように、ハンドボールにおいてパスは、戦術的に重要な技術となっている。

第四章 投げ方・パスの指導法

どうすれば相手に運動形態の形成を促し、伝えることができるのか。相手はどのようにして運動形態を身につけ、どのように運動形態を発生させるのが指導において重要になる。観察の意義は、何が読み取れなければならないのか、何を見分けようとしているのかをまずもって明らかにすることである。交信の意義は、学習者の各種の能力をチェックし、学習者のもつ運動感覚・能力をとらえておくことや、自ら伝えようとしている運動のあるべき目標像を捉え、その運動の理解を確認しておくことが必要である。

第五章 目標投げの指導法の考察

「ボール遊びの集い」で行われる練習についてまとめ、投運動の指導では、「トルネード投げ」を参考にした。また、目標投げの指導法に関する事例研究をしていく上で、エピソード記述を用いていた。九つのエピソードを上げ、対象への密着性や関与者の表現性といったこと、事象の意味構造そのものに迫り、指導法の考察を行った。

結果としては、①動作の局面を省略、融合して動作時間を短縮②運動リズムの安定③効率のいい運動の伝導④運動の流動性⑤運動の先取り⑥運動の正確さの向上⑦パスコース、パスの強さ、スピードの選択などがあげられる。また、状況判断、コツの習得なども見られた。特に、上達したことは運動の先取りである。目標投げにおいても正確さが向上し、試合の中で多くのパスを成功させていた。

目標投げには、正確にボールが投げられるフォーム、目標を正確に捉えることができる技術が必要である。各部分の動きを、全身の動きに加えて習得することは、効率的な投動作の習得や正確性へとつながっていく技術である。投げそのものの能力を向上させるために、各部分の使い方を習得させる必要がある。そして、目を向けなければならないのが伸長能力や相手の運動の先取りである。これは、ボールを保持して投げ終わるまで動作と同時、もしくは、前後で発揮される必要がある。このように、ボールを正確に投げるためには、瞬時に多くのことを行うことのできる能力が求められるのである。

〈結論〉

本研究は小学校高学年の子どもを対象にして、指導のエピソードを取り上げ、関与観察し、考察を行った。指導法は次に挙げるものである。

- 指導者自身が、指導される者をしっかりと理解し、共に理想像に向かっていかなければならない。対象者の運動感覚世界に共に住み込んで、運動感覚交信できることが重要なのである。
- 投げの理想像を持たせる。
- 投げのしっかりとしたフォームを定着させる。指導では、理想像との違いを見抜く。
- 伸長能力、運動の先取りについて、意識を持たせる。(イメージできる程度でもよい。)
- 投げの構造をしっかりと把握し、伸長能力に注目していく必要がある。
- 相手の運動の先取りの感覚を身につけさせる。
- 課題を難しくしていき、つまづきがあった場合には、指導し、運動の改善を図る。
- 正確な投げの特徴とした五つの徴表を正確に身につけることが正確な投運動へとつながる。

(引用・参考文献省略)